

嶋田智明, 大峯三郎, 神先秀人(編)

**「実践 MOOK 理学療法プラクティス
リスク管理 その解釈と統合
～積極的な理学療法を目指して」**

井上由里

(神戸国際大学リハビリテーション学部)

超高齢化社会への突入と、医療技術の進歩はリハビリテーション医療に大きな変容をもたらした。多様化した対象と要求から理学療法士の専門性がますます脚光を浴びている。その一方、日常の臨床で、その変化に翻弄されながら、急増する新人指導に四苦八苦する理学療法士にはオールマイティーな能力が求められている。

本書の最大の特徴は理学療法士に必要とされるリスク管理を集中治療室から訪問まで日々の臨床場面に即して、オールマイティーに構成されている点である。その魅力はリスク管理を完全マニュアル化していないことである。評価を基に何がおきているか考え、判断する能力を持てるよう導きがある。基本知識の整理と応用への導きを欠かさない反面、重要ポイントは臨床ですぐに活用できるよう簡易的にマニュアル化されている。

パート1は「多くのリスク因子を有する高齢者を受け持ったらどうするか」と題し、カルテや画像から必要な情報を選択、収集し、解釈する一連の流れが理解しやすく説明されている。問診や観察、気づき、勘を重要視している点はエビデンスの時代に逆行しているかのようであるが、それが臨床の基本である。チーム医療での情報交換が事故や廃用性症候群の発生を防ぐ

といった初心に帰る内容である。

パート2の「ICFからみた理学療法介入のポイント」では一般的な脳血管障害は勿論、内科疾患、整形外科術後の理学療法だけでなく、小児科の分野にまで言及している。人工透析患者の理学療法におけるリスク管理では、全体像を把握するための基礎知識が非常に理解しやすくまとめられ、既存症のリスク管理としても十分に応用できる。新しい領域へのチャレンジを後押ししてくれそうである。

パート3の「理学療法治療場面におけるリスク対策」では、筋力トレーニングや物理療法などに関するエビデンスからリスク管理を再考している。

最後に、パート4では「システムとしてのリスク管理」として、病院、施設、訪問リハビリテーション等のリスクマネジメントの実例を紹介している。

更なる情報を求める方には“Further Reading”で関連文献を紹介し、検査データ値の見かたや薬の副作用など臨床で便利な基礎知識を“ミニレクチャー”で復習できる。先輩理学療法士からのアドバイスを随時取り入れるなどの工夫が盛りだくさんである。

本書の中の“事故さえおこななければそれがよい治療か”、“理学療法士は「医師の指示の下で」という法に保護された位置づけに患者に対する責任感を希薄にしていないか”という語りかけが心に響いた。適切なリスク管理遂行の向こうには対象者の能力を最大限に生かす理学療法がある。

学生諸子や新人理学療法士は勿論のこと、新分野にチャレンジしたい理学療法士、管理職を務める理学療法士にも是非お勧めしたい。

●B5判・202頁・2色刷

定価 5,040 円(本体 4,800 円+税)

2010 年 5 月 文光堂・刊